



# 春夏作キャベツ・ブロッコリーの病害

中野 瑞己

近年、春先の温暖な気候により、キャベツやブロッコリーにおける病害虫の発生が増加しています。特に昨年は、高めの気温と定期的な降雨が続いたことで、病害の発生が多く見られました。そこで、春夏作における病害虫対策のポイントを紹介します。

## 1.育苗中の対策

●ハウスの入り口・側窓からの害虫侵入防止

多くの害虫は、入り口や側窓などの換気口から侵入します。開口部には防虫ネットを設置し、侵入を防ぎましょう。防虫ネットの目合いの目安は、大型チョウ目（オオタバコガ、ヨトウ類など）が2～4mm以下、小型チョウ目（コナガなど）が1mm以下とされています。

●換気による温度・湿度の調整

病害は高温多湿条件で発生しやすいため、日中はハウスを閉め切らず、適度に換気しましょう。ただし、急激な換気で冷風が苗に直接当たると葉焼けが生じることがあります。外気温や苗の配置には十分注意してください。

## 2.ほ場での対策

●害虫の防除タイミング

例年、5月上旬からチョウ目害虫の発生量が急増します。4月以降、ほ場をこまめに観察し、初期発生を見逃さずに防除しましょう。また、アブラムシ類の発生も見られるため、チョウ目害虫と同時に防除することが望ましいです。多発させてしまうと防除が困難になるため、初期発生での対応が重要です。

●病害の防除タイミング

病原菌の一部は土壌や前作残渣に

存在し、降雨時の泥はねによって感染が拡大します。また、降雨後は多湿状況が続き、病害発生に適した環境となります。

薬剤防除は「予防」散布が原則であり、感染後や発病後の防除では効果が低下します。したがって、降雨前の散布が重要です。ただし、降雨による薬剤流亡もあるため、必要に応じて雨後の防除も行いましょう。

●残渣のすき込み

収穫後の残渣をほ場に放置すると病害虫の発生源となり、周辺ほ場や次作に悪影響を及ぼします。収穫後は速やかにすき込みを行いましょう。

## 3.農薬のRACコードについて

RACコードは、農薬が「どう効くか」（作用機構）を分類した記号で、同じ効き方の農薬を続けて使うことで害虫・病害が薬に強くなるのを防ぐために活用されています。農薬ボトルのラベルに記載されており、殺虫剤はIRAC、殺菌剤はFRACという区分があります。異なるRACコードの農薬をローテーションして使うことで、抵抗性の発生を抑えることにつながります。農薬による防除を行う時は、有効年月以内の農薬をラベルの記載に従って使用してください。

## 4.黒すす病について

近年、黒すす病の発生が増加しています。本病は葉に黒斑を生じ（写真1）、主に下位葉から発生します。多発すると、キャベツでは結球部に



▲写真1 キャベツの下位葉に発生した黒すす病

黒斑が、ブロッコリーでは花蕾に黒色のカビが生じます（写真2）。

一部薬剤への感受性の低下（低感受性菌＝薬剤が効きにくい菌）が確認されており、特に菌核病対策でよく使用されるSDHI剤（FRACコード7）、QoI剤（FRACコード11）への低感受性菌が増加しています。愛知県農業総合試験場で行われた薬剤感受性試験の結果、FRACコードM3、M5、2、12、19などの薬剤は低感受性菌に対して高い効果があるとわかりました。ただし、現場では作型や菌株、気象条件等により効果が異なる場合があります。また、効果が高い薬剤であっても、同じ系統の薬剤ばかりを使用すると低感受性菌（黒すす病以外にも菌核病など）の発生リスクが高まるため、RACコードの異なる薬剤でローテーション防除を心がけましょう。

防除時期のポイントとして、定植2～3週間後と4～5週間後に1回ずつ農薬を散布し、その後キャベツでは結球初期、ブロッコリーでは出蕾期にもう一回は散布することを目安にし、気象や生育状況に合わせて追加防除しましょう。

農薬を混用して散布する場合、農薬や展着剤の種類、散布時の気象条件によっては薬害のリスクがあるため、よく確認してから使用してください。



▲写真2 ブロッコリーの花蕾に発生した黒すす病